

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 13年2月

～生産は予想外の低下、実体経済の回復は緩慢は緩慢

経済調査部門 経済調査室長 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

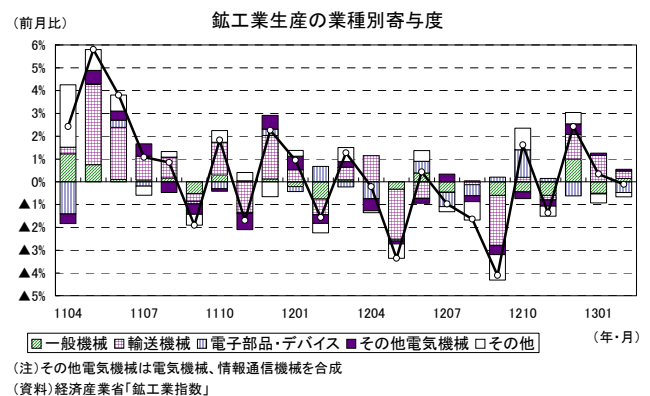
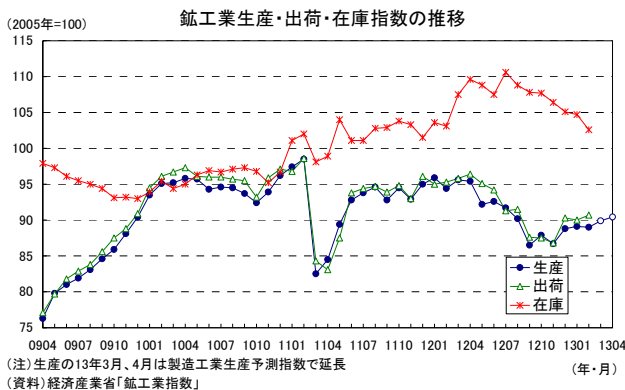
1. 市場予想を下回り、3ヵ月ぶりの低下

経済産業省が3月29日に公表した鉱工業指数によると、13年2月の鉱工業生産指数は前月比▲0.1%と3ヵ月ぶりの低下となった。先月時点の予測指数の伸び（前月比5.3%）、事前の市場予想（QUICK集計：前月比2.5%、当社予想は同1.5%）をいずれも大きく下回った。出荷指数は前月比0.8%と2ヵ月ぶりの上昇、在庫指数は前月比▲2.0%と7ヵ月連続の低下となった。

アベノミクスへの期待から円安、株高が進み、企業、家計のマインドは大幅に改善しているが、輸出、生産などの実体経済の回復は極めて緩やかなものにとどまっている。

2月の生産を業種別に見ると、国内販売の持ち直しを背景に輸送機械が前月比1.8%と好調を維持し、一般機械（前月比1.3%）、鉄鋼（同2.1%）なども堅調だったが、先月時点の予測指数では前月比14.5%の高い伸びとなっていた電子部品・デバイスがスマートフォン向けの落ち込みが響いて同▲5.0%と大幅なマイナスとなったことが指数全体を大きく押し下げた。

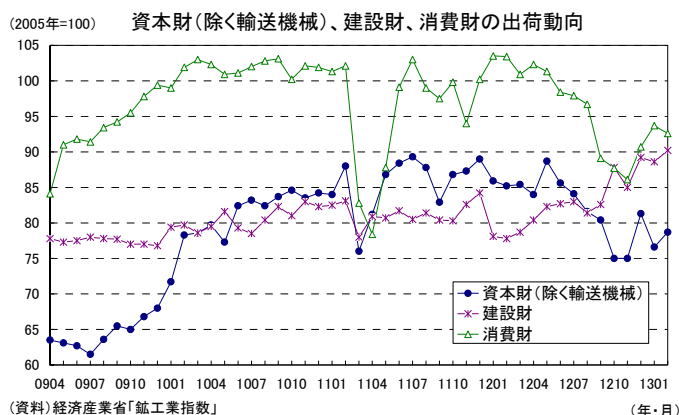
速報段階で公表される16業種中、10業種が前月比で上昇、5業種が低下した（1業種が横ばい）。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は12年10-12月期の前期比▲6.0%の後、13年1月が前月比▲5.8%、2月が同2.7%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は12年10-12月期の前期比6.1%の後、13年1月が前月比▲0.7%、2月が同1.8%となった。13年1、2月の平均を12年10-12月期と比べると資本財（除く輸送機械）が0.7%、建設財が2.4%高い水準となっている。GDP統計の設備投資は12年1-3月期から10-12月期まで4四半期連続で減少しているが、13年1-3月期は緩やかながら5四半期ぶ

りの増加となる可能性が高いだろう。

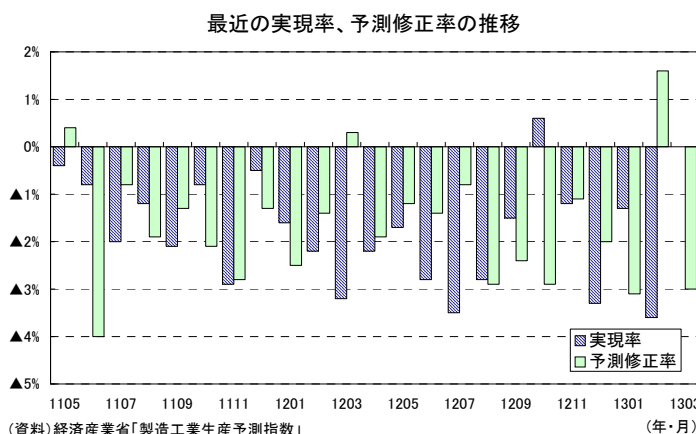
消費財出荷指数は12年10-12月期の前期比▲6.8%の後、13年1月が前月比3.3%、2月が同▲1.2%となった。1、2月の平均は12年10-12月期よりも5.7%高い水準となっている。GDP統計の個人消費は12年10-12月期に前期比0.5%と3四半期ぶりの増加となったが、13年に入ってから堅調を維持している。



2. 実体経済の回復は緩慢

製造工業生産予測指数は、13年3月が前月比1.0%、4月が同0.6%となった。生産計画の修正状況を示す実現率(2月)、予測修正率(3月)はそれぞれ▲3.6%、▲3.0%と大幅なマイナスとなり、ほとんどの業種で生産計画が下方修正されている。円安が大きく進んでいるにもかかわらず企業の想定通りに輸出が回復していないことが影響していると考えられる。特に電子部品・デバイスは実現率(▲14.0%)、予測修正率(▲10.6%)ともに1割を超えるマイナスとなった。

予測指数を業種別に見ると、情報通信が3月(前月比▲8.5%)、4月(同▲19.1%)ともに大幅減産計画となっていることが目立つ。また、ここにきて再び生産のけん引役となりつつある輸送機械は、3月は前月比▲2.3%と4ヵ月ぶりの減少となるが、4月は同3.7%と高めの伸びが見込まれている。



13年2月の生産指数を3月の予測指数で先延ばしすると、13年1-3月期は前期比1.7%の上昇となる。4四半期ぶりの増産は確保されそうだが、先月時点では5%以上の伸びが見込まれていたことからすれば、生産の回復ペースは緩慢で期待を裏切るものとなっている。

企業が増産計画を維持していること、在庫指数が7ヵ月連続で低下するなど在庫調整圧力が低下していることなどから、現時点では生産が腰折れしてしまう可能性は低いと考えられる。ただし、輸出の低迷が長引くようであれば、生産がさらに下振れするリスクが高まる。景気は期待先行で回復ムードが高まっているが、鉱工業生産をはじめとした実体経済の回復がさらに遅れるようであれば、期待が失望に変わる恐れもあるだろう。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。